舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群『沒有祖国的孩子』の周辺

平石淑子

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったこともあり、他に研究ノート

舒群は、本名を李書堂、又に李旭東と名のつかったことあり
喚起ロシア語を補習し、革命の道を教えたという。彼はこ
人は共産党の書物を読むことはできなかったが、
をつなぐために、革命の道を教えたという。彼はこ
だという。

一方で、親父は海軍に勤務する商船学校に入学することを余儀なくされた。しかし、彼の学業に対する意欲は薄く、授業に出席することすら困難だった。商船学校は、高等中学一年の学歴が無く、しかも学用品の他に毎月五元の補助費を支給してくれるだけであり、学校の卒業生の待遇もあまり好評ではないため、彼はこの学校に通うことを選択せざるを得なかった。

一方で、親父は親父と呼ぶべき彼の家族の生活は面倒で、貧乏の日々を送っていた。半ば、彼は親父の家族の生活を改善することを目的に、商船学校に入学した。しかし、親父の学業は面倒で、授業に出席することすら困難だった。親父は、学校の卒業生の待遇もあまり好評ではないため、この学校に通うことを選択せざるを得なかった。

親父は、学校に入学したことで彼一人の生活は保証されただけで、彼の家族の生活は面倒で、貧乏の日々を送っていた。半ば、彼は親父の家族の生活を改善することを目的に、商船学校に入学した。しかし、親父の学業は面倒で、授業に出席することすら困難だった。親父は、学校の卒業生の待遇もあまり好評ではないため、この学校に通うことを選択せざるを得なかった。

親父は、学校に入学したことで彼一人の生活は保証されただけで、彼の家族の生活は面倒で、貧乏の日々を送っていた。半ば、彼は親父の家族の生活を改善することを目的に、商船学校に入学した。しかし、親父の学業は面倒で、授業に出席することすら困難だった。親父は、学校の卒業生の待遇もあまり好評ではないため、この学校に通うことを選択せざるを得なかった。
ま、この会社で読ませて下さい」と言って彼女はそれを自分
の部屋に持って行ったが、何日かたって私にこう言った。

「あなたの小説はとてもよく書けていますよ、私が周揚に渡
しておきました。これが全く偶然のでき事だった。

それは私が苦痛から直接聞いた。彼女は当時の左連の一員だっ
た。彼女は「私は、私が狩物の前を通った。時には中
部屋に住んでいたのだが、白藜にまつわかつての事実
がある。」と彼女は私に話をしてきた。彼女のに
書きおえなかったばかりの「没有祖国的孩子」の原稿があった。彼
女はそれを手に取り、ちょっと目を通しに来た。と喜ん
でいたが、それが果たせないので増しているうちに白藜に出会った

「没有祖国的孩子」が発表された直後、周揚は「現代的文
学」の中で、「廃軍、八月的鄉村」、「蘇紅」、「生存場に続いて舒
群を紹介し、礼讃している。現在特に重要な意義を持つ
っている最近登場した新人作家群が、彼の健康で、また素朴な
風格を以て、ほとんど人々の注意を引くことのない、国を失
った子供の物語を、今まさに侵略されつつある。我々が
家族を愛し、生き延びている東北の同胞の生活と闘いを描き、す
ら奇妙に新鮮な効果をあげたということと、我々の大きな期待な
かった。また周立波は「一九三六年的回顧」の中で多くの東北作家につ
いて詩筆し、「今年創造力が最も豊かであった新作家」として

周群に言及している。
彼は祖国を失い、ふみにじまれ、差別された人々の生活を
描き、ゲリラや東北人の抵抗と闘いの物語、九・一八以後の
東北の学生の愛国活動や獄中生活を描いた。「彼の掲げる人
心を持っています。これは亡国の民の顔をした。独立した人格と誇り高い
心理をもつ東北民族にあらわる一つの特徴が、民族と自己自身に対して加える
であろう。彼は現在正に必要されている民族解放運動の原動
力としていることによるのである。

即ち、彼の「沒有祖國的孩子」は、民族解放と
独立という主題を、周囲を周り立てるような
図や万国旗の中に我々が一度も見したことのない
国に変わり、ソ連の学校が囲まれ、教員も学生もすべて祖
国のロシアに帰る
ことになった時、ただ一人帰るべき場所のない果里に対
して蘇

「没有祖國的孩子」の周辺

『僕は朝鮮だ』と胸に張って叫ぶに至る、というストーリー、
民族の解放と独立という独立を、周囲を周り立てるような
図や万国旗の中に我々が一度も見したことのない
国に変わり、ソ連の学校が囲まれ、教員も学生もすべて祖
国のロシアに帰る
ことになった時、ただ一人帰るべき場所のない果里に対
して蘇

『僕は朝鮮だ』と胸に張って叫ぶに至る、というストーリー、
民族の解放と独立という主題を、周囲を周り立てるような
図や万国旗の中に我々が一度も見したことのない
国に変わり、ソ連の学校が囲まれ、教員も学生もすべて祖
国のロシアに帰る
ことになった時、ただ一人帰るべき場所のない果里に対
して蘇

『僕は朝鮮だ』と胸に張って叫ぶに至る、というストーリー、
民族の解放と独立という主題を、周囲を周り立てるような
図や万国旗の中に我々が一度も見したことのない
国に変わり、ソ連の学校が囲まれ、教員も学生もすべて祖
国のロシアに帰る
ことになった時、ただ一人帰るべき場所のない果里に対
して蘇
西

（一）里村、小石『小建群伝』『東北現代文学史稿』第二輯

注

茶の水女子大学中国文学会報 第一号

中東鉄路の敷設権を獲得したのに伴い、中東鉄路の基地とし
て建設された新しい、異国情緒にあふれた都市であった。そこ
には中国人、ロシア人をはじめ、さまざまな民族が住みつぎ、
それぞれの民族の喜怒哀楽、それぞれの民族相互の友愛や対立
がすべてのみなざされていた。哈爾浜地下党員で群衆とも親交の
あった姜振芳は、一九三〇年代当時の哈爾浜についてこう記し
ている。

第一次世界大戦が終り、ロシアの十月革命が勝利をおさめ
た後、ヨーロッパ各国の生産の道を求める多くの人々が、大
量の白系ロシア人を含めて思い思いにして、この片隅の
地哈爾浜に一つの「洋世界」を作りあげた。哈爾浜は、規模はわり
あい小さかったが、東南の上海とははるかに見える洋風の場所であっ
た。彼は更に続けて、ただ中国人は、特に芸術方面において西洋
人とは隔てており、青年たちの目を向けるには上海から
の新文化の導入を待たねばならなかったことを指摘している。

一九四〇年代に、彼の作品は、特に芸術面において西洋
風の場所であった。彼は彼自身を東海の地として描きつけること
で、彼は自分自身を育てた環境と無縁であるはずなく、彼

注
昭和五十八年三月卒業（九名）

池田佳津江

楊潔研究：『青春の歌』を中心として

上田ゆかり

曹禺：『日出』十二色相色環の人間模様より見た

加藤美

木谷富士子

野村尚子：『菊子』美論における中国古代音楽思想とその展

昭和五十七年九月卒業（二名）

豊田恭子

中沢みゆき

紅樓夢研究：飲食物並びに薬物語彙を通し

丹羽圭子

木村勝

里として

昭和五十八年三月卒業（二名）

日田真佐子

江永『古語彙演』研究

戸沼市子

時代の転換期における『飲食』語彙研究：体言を中

昭和五十七年九月卒業（二名）

栗山千香子

高岡隆

明・兼好をめぐって

【金剛眼与哈爾斯革命文芸活動について】（東北現代文学史料）

第一輯 80・3 黒竜江社會科学院文學研究所石

人間文化研究年報 第四号 80 お茶の水女子大学人文

間文化研究科がある。併せて参照いただければ幸いで

追記

書は、筆者の記録にもとづいて筆者自身が再構成したも

のであり、群的自身の校閲は経ってない。（八三・四）

高坂ゆかり

魯迅と葉亭

小松あけみ

謝冰心：『分』への足跡

豊田恭子

中国個人主義：思想の系譜：周作人を手が

加藤美

木村勝

野村尚子：『菊子』美論における中国古代音楽思想とその展

昭和五十七年九月卒業（二名）

豊田恭子

中沢みゆき

紅樓夢研究：飲食物並びに薬物語彙を通し

丹羽圭子

里として

昭和五十八年三月卒業（二名）

日田真佐子

江永『古語彙演』研究

戸沼市子

時代の転換期における『飲食』語彙研究：体言を中

昭和五十七年九月卒業（二名）

栗山千香子

高岡隆

明・兼好をめぐって

【金剛眼与哈爾斯革命文芸活動について】（東北現代文学史料）

第一輯 80・3 黒竜江社會科学院文學研究所石

人間文化研究年報 第四号 80 お茶の水女子大学人文

間文化研究科がある。併せて参照いただければ幸いで

追記

書は、筆者の記録にもとづいて筆者自身が再構成したも

のであり、群的自身の校閲は経ってない。（八三・四）

高坂ゆかり

魯迅と葉亭

小松あけみ

謝冰心：『分』への足跡

豊田恭子

中国個人主義：思想の系譜：周作人を手が

加藤美

木村勝

野村尚子：『菊子』美論における中国古代音楽思想とその展

昭和五十七年九月卒業（二名）

豊田恭子

中沢みゆき

紅樓夢研究：飲食物並びに薬物語彙を通し

丹羽圭子

里として

昭和五十八年三月卒業（二名）

日田真佐子

江永『古語彙演』研究

戸沼市子

時代の転換期における『飲食』語彙研究：体言を中

昭和五十七年九月卒業（二名）

栗山千香子

高岡隆

明・兼好をめぐって